

あきらめない気持ち

〔冒頭部分の概要〕 44日間の夏休みを振り返り、部活動等の全国大会・関東大会・県大会等での生徒の活躍を取り上げました。その中でも特に注目したのは、女子バレーボールの県大会・準々決勝でした。試合を通して感じる事ができたのは生徒の皆さんの「あきらめない気持ち」であり、同時期に開催していたパリオリンピックのスケートボード男子ストリートや体操男子団体でのエピソードと重ね合わせました。

※オンライン集会 生徒はスライドを見ながら話を聞く。

ここまで、女子バレーボールの県大会・準々決勝とパリオリンピックのスケートボード男子ストリートや体操男子団体でのエピソードとを重ね合わせ、「あきらめない気持ち」の大切さについてお話をしてきました。「あきらめない気持ち」をもって大逆転勝利をおさめたり、1番になって金メダルを獲得したりすることは、もちろん素晴らしいことです。では「勝利をしたり1番になったりしなければ価値がないこと」なのでしょうか。もちろんそれは価値あることです。そのことを、前期後半早々に実施する体育祭を例に考えてみましょう。体育祭練習を重ねてくると、各団・学級では気持ちも高まり「リレーで〇団に勝とうね」「絶対優勝しよう」などの声が飛び交うことと思います。「優勝を目指す！」など、順位を目標の1つにすること自体は悪いことではありません。わかりやすく皆の気持ちを一つにしやすいためです。ここでみなさんに考えてもらいたいのは、順位をつけるのであれば、1位もビリもあるということです。「びりのきもち」（坂田寛夫）という詩を紹介します。ビリの気持ちを考えれば、負けて悔しい、恥ずかしい・・・などの思いを挙げる事ができます。運動が苦手な人にとっては、「自分が足を引っ張ってしまった」「私のせいで負けた」などと思ってしまうかもしれません。私自身を振り返ってみても、小・中学生の頃は、運動ができるかそうでないか、テストの点がとれるかそうでないか、で全てが決まってしまうかのような感覚をもったことがありました。年を重ねてくると、それが錯覚であることに気付くのですが、中学生のみなさんは、まだ目の前の世界が狭いこともあり、私と同じような感覚をもってしまうことがあるかもしれません。今、お話を聞いている生徒の中にも、運動に対する苦手意識が強く、体育祭を迎えるのがつらいと思っている人もいます。私は「あきらめない気持ち」「最後までやり抜く気持ち」で練習や本番に臨んだ結果のビリであれば、それでもう十分だと思います。みんなのために、1番になりたい、優勝したいという思いであったのであれば、それ以上のことはありません。最高です。ビリでも、堂々と胸を張ればいいです。私が好きな言葉を紹介합니다。東井義雄さんの詩です。「一番はもちろん尊い。しかし、一番よりも尊いビリだってある。」「あきらめない気持ち」「最後までやり抜く気持ち」が大事なのですよ。

それは、体育祭をはじめ、運動やスポーツにかぎるものではありません。文武両道すべてにあてはまります。結果が全てではありません。「あきらめない気持ち」を大切に！